江戸時代、カトリックのキリスト教を信じていた人たちのことを、「キリシタン」と呼んでいました。一六一四年、江戸幕府の徳川家康は、キリスト教を禁止しましたが、一八七三（明治六）年二月二十四日、キリスト教禁止の高札（立てふだ）が取り払われました。つまり、今からちょうど百五十年前の今頃、キリスト教の禁止が終わったという訳です。

江戸時代、キリシタンの人たちは、拷問されたり、殺されたり、大変な思いをしていました。そのため、仏教徒のふりをして、隠れてキリスト教を信じる人を「隠れキリシタン」と呼んでいました。私も君たちのお父様やお母様も、学校でこの言葉を習いました。多分知っておられる方も多いと思います。

その頃は大雑把に、「隠れキリシタン」という言葉で習いましたが、今は、「潜伏キリシタン」や「隠れキリシタン」のように、二種類の言葉を分けて使っています。

ごく簡単に言ってしまうと、「潜伏キリシタン」というのは、江戸時代、密かにカトリックの教えを信じ続け、キリスト教が許された一八七三年以降は、カトリック教会に戻った人たちのこと。「隠れキリシタン」というのは、キリスト教が許された後も、カトリック教会に戻ることがなく、自分たちの独自の信仰を続けた人たちのことを指します。

そう言えば、私が小学校六年生の頃は、江戸時代、キリシタンかどうか見分ける方法として「踏み絵」をさせられたと習いました。この踏み絵、イエス様やマリア様が描いてある絵や板を踏ませることで、恐れ多くて踏めないという人は、キリシタンと判断され捕まりました。この踏み絵も、今は「絵踏み＝えぶみ・えふみ」と言い換えられています。

絵を踏む行為を「絵踏み」、踏まれる絵の方を「踏み絵」と言っています。何だかゴチャゴチャしていますが、歴史の用語って、たまに変わるのですね。

長崎市浦上地区のキリシタンが流された地域の一つだった、奈良県大和郡山市の築約百年の古民家の、天井近くの隠し部屋のような場所から、火鉢のような器の中に置かれていた石像が見つかりました。この石像は約十三センチ。子どもを抱いた観音像で、「マリア観音」の可能性もあるということで、今調べている最中だと、二月六日の読売新聞のオンラインの記事に出ていました。潜伏キリシタンや隠れキリシタンの人たちは、観音像の背中を開けると、十字架が出てきたりする仕掛けのある仏像を「マリア観音」として密かに拝んでいました。さらには、「キリシタン魔鏡」という物も。

青銅を砂の型に流し込んで（鋳造）、模様つきの銅の板を作ります。模様と反対の面を削って、磨いて鏡にしたものを「銅鏡」と言います。その四～五ミリの銅の板を鉄のやすりと「セン」という道具で削ります。一ミリ削るのに十日。三ミリ削るのに一か月かかります。その後炭で磨いて二～三か月かけて完成。鏡の面を削るとき、やすりの圧力によって、鏡の背中側の模様のへっこみ部分は、下方に押されても「逃げ」があるので、一度へこんで元に戻り削られません。逆に背中側のでっぱり部分は、鏡面から圧力をかけると「逃げ」が少ないため、鏡面部分が微妙に削られます。肉眼では見えないくらいの微妙なへこみに、光が反射すると、背中の部分の絵が浮き出るというのが「魔鏡」の原理です。（子どもたちには、図を描いて説明しました。）

十字架やイエス様の絵の銅鏡を鋳造して、それを削り磨く。十字架やイエス様の絵の部分（鏡の背中側）に他の絵の付いたふたをする。その鏡に光を当てて壁などに映すと、さて、何の絵が映るかもう、お分かりですね。

実物を見たくなりませんか。聖公会の仲間の学校、大磯のステパノ学園の創設者、澤田美喜さんの記念館に行くと、本物の魔鏡やマリア観音、絵踏みの踏み絵が見られます。

私の話が、信仰を守り続けてこられた方々の苦労に、思いを寄せるきっかけになれば有難いです。（立教小学校校長　田代　正行）